

月報	日本キリスト改革派 横浜中央教会	8月号 2011年8月21日
----	---------------------	-------------------

託されている祝福と責任

K. T

この題名に聞き覚えがあると思います。昨年11月に中会の教育委員会が東京恩寵教会で行ったCSクラスと講演会の時のテーマです。中央教会からも多くの参加者がありました。今年もぜひ参加していただきたいと思います。

さて、このテーマが意味するところの、祝福と責任とは？託されているのは誰か？神様から授かった祝福とは契約の子、責任とはその祝福を共に見守り導き育てる責任。託されているのは私たち信徒一人ひとりです。契約の子を持つ親として、教会員として、役員としてそれぞれ違った立場でその訓育に真剣に関わっていく責任があるのだと思います。両親はもとより、牧会の祈りでも「御言葉によって成長し、主イエスキリストこそ自分の救い主であることを告白することができますように」と祈ります。一人の子がどのような道筋をたどって信仰を持つのかは神さまにしかわかりませんし、お委ねするのですが、任せきりではいけません。その子が教会に連なって洗礼を受ける祝福を私たちは祈り求めるとともに、その時に必要なことを見極めて援助することも大切です。

その援助の手立ての一つとして大事だと思っていることがあります。それは、子が教会にしっかりと結ばれるためには、成長したある時期になったら改革派教会という大きな組織の中で横のつながりを密にさせることが有益だということです。子どもは成長するに従って親子の狭い関係から離れ、仲間同士友達同士の関係に広がっていきます。そこには親子にはない発見や新しいものの見方や考え方をする別人格の存在があります。その交わりは楽しいものです。その対象が教会内にいなくても東部中会の諸教会にはたくさんいます。洗礼を受けていなくても神様を信じる同世代同年代の友達との交わりが、自分が神様から離れないように手助けをしてくれると考えられます。神様を信じる友達がたくさん身近にいて、友達の輪があったら、生きていくのに随分心強いはずで、相談もでき悩みも話し、主にある話し合いがなされるはずで、また、自分はまだ洗礼を受けていなくても同世代の若者がすでに信仰を持ってバリバリ奉仕をしている姿や信仰告白をしていく姿を見ることによって、自分自身について客観的に考えるようになるでしょう。

春と夏のバイブルキャンプやサマーデイズなど中会や大会が若い人のために主催するキャンプや修養会はたくさんあります。参加可能な年になったら、有無を言わずぜひ参加させてみてはいかがでしょうか。それが、信仰を大きく成長させるために必要な手段の一つだと思います。

花を育てて思うこと

P. K

我が家は南西方向に面していて、真夏の夕方になると西日が強すぎて、花や木を植えてみる事など、考えられませんでした。しかし、3月11日の東北大震災以来の電力状況の中、節電に協力する気持ちと横浜中央教会への加入記念のつもりもあって、ベランダに花を植えてみようと考えました。（私、7月3日に加入いたしました。これからもよろしくお願ひします。）

そこで、寒さや暑さにも耐えられ、そして、日除けにも効果的な花や木を探している内、ピンクや淡い紫色のムクゲ（韓国の国花）が綺麗に咲いていて、背丈も、ちょうど良かったので、四つ買ってきて植えました。つぼみから満開になって5、6日の間綺麗に咲いていて、見ている人達の気持ちを和ませてくれます。いっぱい楽しませてくれた後も花びらを閉じて落ちるので掃除するにもとても楽しく・・・（何てお行儀の良い花なんだろう・・・）

成長の楽しみのあまり“世話しすぎて、水や成長剤を与えすぎ無い様に”と、うちの人に注意される時も有るぐらい、楽しんだ一方、また、こんなに日が強くても花や木は、ちゃんと育つんだという、生命力の強さも感じました。自分の感性で物事を考え、神様から与えられた草花の本来の強さを忘れていたのです。今更ながら気付いたのですが、周りの全ては強い力によって動かされている。

また、もう一つ思い出した事があります。結婚前の事です母は、お花が大好きで、家には色んなお花が、いっぱい有りました。とくに、サボテンの花が咲くと、その美しさは、母体であるトゲトゲしたサボテンの花だとは思えない程、綺麗な花でした。じっと、みとれていた私に、母が問いかけました。

“この世の花は、全て綺麗だけど、さらに綺麗で飽きない花は何だか知ってる？”

“何だろう”

“インコッ（人花）なんだって”

“そういう名前のお花があるの？初めて聞く名前だわ！”

“それは、花の名前じゃなくて神様のかたちをとった、人間のことを花に例えた事で飽きないと言うのは花に例えた人間の表情の事なんだって。”

“あ！言えるね。”

“それに伴って人が、どんな表情をするかによって綺麗な花に見えたり醜い物に見えたりするのもね！”

その時の会話が、未だに忘れてないのをみると、よっぽど印象深かった様です。

これからでも、飽きない綺麗な花作りに励んでみようかな！

それと、私の周りには、どんな飽きない綺麗な花達がいるのか探してみよう。

これからの楽しみです。

読書感想～アメリカについて～

N. K

アメリカ(合衆国)についての本をたまたまですが、何冊か読む機会がありましたので、そのことについて書いてみます。

“目からウロコが落ちた”のは「街場のアメリカ論」(文春文庫)です。著者の内田樹は、この十年ほど積極的に著述活動が続けているフランス現代思想の教授であり(今春退官したらしいけど)、今私に最も影響を与えている思想家であります。内田によれば、日本人にとってアメリカだけは特別な国で、日本人は深層心理の中にアメリカに対して(だけは)強い依存心と反発心とを抱えている。反米・親米それぞれ政治的立場は異なったとしても、そのねじれはほとんどの日本人に見られるという。ここらほうまく説明できないので、興味ある人は実際に手にとって読んでください。たしかにアメリカに対してだけは我々は特別な見方をしているかもしれません。

そんな意識から「ルポ貧困大国アメリカ」「ルポ貧困大国アメリカⅡ」堤未果(岩波新書)を読んでみると、アメリカという国はいやはや大変なことになっているのですね。堤は格差が拡大するアメリカの姿を描き出していて、読んでいて本当につらくなります。例えば、アメリカでは奨学金制度と学資ローンが民営化されていて、多くの大学生が借金の返済に卒業後ずっと悩まされる仕組みになっている。その利率は恐ろしく高く、他のローンには適用される自己破産制度も学資ローンだけは外されており、その借金は生涯決して減免されることなくついてまわるという。

ご存じのようにアメリカ合衆国には日本のような国民皆保険制度はありません。そして皆保険制度を作ることはオバマ大統領の選挙公約であったことも広く知られていますが、実際にはものすごく抵抗が強い。そこには自助努力を重んじるアメリカ人特有の意識もあるのですが、もう一つ見落とすことができないのが業界の政治影響力です。保険制度については医薬・保険業界が巨額の資金を投入して反オバマキャンペーンを行い彼の施策を潰したそうです。学資ローンについても当然金融界の働きかけがあったのでしょう。私などは、オバマ氏が大統領に就任すれば戦争が収まり福祉が進展するなどと思っていたのですが、そんな甘いものではないのですね。

堤によれば、アメリカ社会は広く市場原理に侵食されており、年金、健康保険はもちろん戦争も刑務所も民営化され、国家が保障すべき基本的人権は“自己責任”の名のもとに簡単に切り捨てられ、中流層はいま急速に低所得層へと没落していつているそうです。

その市場原理を哲学の観点から問題にしている人、それがハーバード大学のマイケル・サンデル教授(早川書房、NHK出版など)。彼のような知識人を生み出すのもアメリカなんだな。以上。最近の読書の感想でした。